

平成 20 年度第 3 回経営学教育 FD/IT 活用研究委員会議事録

- I. 日時：2008 年 2 月 9 日(月)10:00-12:00
- II. 場所：私立大学情報教育協会 会議室
- III. 出席：岩井千明委員長、佐藤修委員、安田英士委員、大野富彦委員、石川伊吹委員、若木宏一委員、大塚晴之委員、竹田昌弘委員、丹沢安治委員
事務局 井端事務局長、森下主幹、恩田係員

議事概要

1. 事務局説明

- (1) 「分野別「学士力」考察の中間報告（お願い）」について、昨年、11 月に文部科学省に報告した内容及び「学士課程教育の構築に向けて」（平成 20 年 12 月 24 日）が事務局から報告された。今回の報告では、分野別の最小要件を IT と結びつけながら検討した。
- (2) 21 年度にかけての委員会の活動について、資料で説明された。私情協は 12 月までに詳細な学士力基準を作る予定。
- (3) 学術会議の英国 QAA の英国のベンチマークについて紹介があり、委員から参考になるとの指摘があった。
- (4) 学術会議の大学教育の分野別質保証のあり方の委員会について説明が行われた。これからは詳細な学士力の基準を作っていく。学術会議から意見を求められることも考えられる。
- (5) 今後は、(資料①から)学士力の明確化として、共通能力、コアカリのイメージ、能力判定・測定方法を ICT と関連させながら検討していく、続いて教員の教育力を検討し、4 年後には 500 ページ程度の報告書にまとめる予定である。

2. 検討内容

- (1) アウトプットを出すのは平成 24 年として、委員会での検討を進め、提言をまとめる。現場の教師の意見を出すことに意義がある。
- (2) 私情協は、私立大学と ICT という枠組みでアプローチする。
- (3) 「質保証」について、OECD ないし、世界的に行われており、大学卒業の質について（人間力について）問われている。私情協のデータも活用されている。
- (4) 質疑内容
 - ・ 来年度の課題は、4 つの課題を詳細なものにすること。
 - ・ 学士力を詳細にする際に、「共通能力」とは何か？
配布資料のように、科目以外に何か知っていてほしいもの、たとえば、経営学から見た一般教養のようなもの。
 - ・ こちらのほうが企業から見ると重要ではないか。

- ・これが「人間力」ということか？
- ・それは、豊かな人間性のことだ。
- ・すこし話がそれるが、教育のレベルを上げるために、産学連携として教員のインターンシップが行われようとしている。

(5) 本委員会のこれまでの検討の経緯が説明され、これまでは各委員が自分で実行している ICT を用いたケースを持ち寄った検討であったが、来年度は学士力を検討し、その実現手段としての ICT 活用と教員の教育力向上を目指すこととした。

また、これまでは関東の委員ばかりだったが、関西のメンバーにも参加してもらうことになった。

3. ICT と学士力について

ICT と学士をどのように関係させるかについて、前年度に確定した学士力に関する 4 つの項目を確認し、新任委員を中心に、各委員の意見を聞いた。

- (1) GP 申請時にこれらのことを組み込んだ。具体的には、自前のコア科目に対応するビジネスゲーム、(横国の)ビジネスゲーム、コミュニティサイト、企業人(実務家教員)の講義を統合したゼミである「実践的経営シミュレーション演習」を開設し、コミュニケーション能力と経営知識を兼ね備えた人材を育成するための実践的なビジネス教育を目指している。また、キャリアゼミ（自分の生涯設計から逆算してキャリアデザインをやらせる）を開講している。ここでは教育力が問題になっている。
- (2) これから資料を読み込みたいが、SNS などでコミュニケーション能力の促進を実行している。
- (3) 自分のところでは学生をどうやって卒業させるかを考え、英語、数学、勉強の仕方、キャリア教育を実践している。そのために、「教育講師」（定年、給与体系が教員と異なる）を置いている。また、教員に対する評価は厳しく、研究論文はジャーナルへの掲載を得点化し、教育については、受講生の数で評価する。3 年の一回行われ、これで給与も来ます。また、教員の 7 割が実務家教員であり、教員のインターンシップは必要ないだろう。
- (4) 自分のところはもともと情報関係である。1 年生にはコミュニケーション能力、文章の書き方、コンピュータの使い方を教える。2 年時では、経済的な統計データをエクセルなどで加工し、含意を読み取るトレーニングをする。3 年ではコースに分かれ、パソコンでビジネスプランを作るなど、ゼミに入ってから会計や戦略の視点から情報を役立てようとする。
- (5) 4 つの項目は抽象的であり、多くのことが含まれている。これから詳細化することが重要だ。
- (6) 4 つの項目に同情報を生かしていくかが来年度の問題だ。
- (7) 学校によってそれぞれ事情が異なるので、ある程度抽象的になるのはやむを得ないだろう。

(8) どのようにコアカリとして具体化するかが重要な問題だ。

4. 今後のスケジュールについて

(1) 12月にまとめた文書を出すために、グループを作って分担しなければならない。

詳細な基準を作るグループとコアカリを作るグループに分けたらどうか？

(2) 21年度にかけての委員の変更について検討。

21年度から大塚委員に委員長をお願いすることを決定した。